

救急レジデントマニュアル 第4版

相川直樹, 堀 進悟 編

＜書評者＞ 豊岡照彦 (東京大学名誉教授・循環器内科学)

救急診療は、初期治療が患者の予後を決定する大きな要因である。初期対応によって将来の QOL も左右する面があり、特に実践性が重視される。今回、慶應義塾大学救急医学のスタッフが中心になって執筆した『救急レジデントマニュアル第4版』は、初版以来のコンセプト、「理論より実践」や「時間軸に沿って、優先順位と簡潔な記述」を重視する理念を活かしつつ、大胆な改善が随所に加えられた。

最近の阪神大震災、地下鉄サリン事件や9・11などの大規模なテロ活動、新型インフルエンザに代表されるように、救急部が扱う領域は内科、外科の枠を超えて多岐にわたり、かつ複雑化している。一方、社会的には医師の絶対数は増加しつつあっても、産婦人科、小児科の救急体制は一部の施設で撤退せざるを得ないほど逼迫しており、緊急医療の整備として今後救急部への要望は一層高まると予想する。

昔、医学部紛争で卒業が1年遅れになったわれわれは、途中で自己研修と称して医学部から放り出された。内科系を志望していた筆

者は将来経験することの少ない外科系をあえて選び、長時間の手術の鉤引きや術中の血液ガス分析(BGA)、皮膚縫合と抜糸まで教えられた。卒業後はCCUが独立する前のICUで先輩たちと寝食を共にした。この間に対人関係も含めたチームワーク医療の大切さなど精神面の修養も教示いただき、今でも感謝と懐かしい思いが重なる。その当時、救急医療の実践的な参考書がまったくなく、先輩の手技をメモしながら体得していくしかなかった。現在でも医療は知識でなく体験を通してしか真の理解に至らないと確信しているが、その理解が科学的に系統だったものか自信がない。

卒業直後で臨床経験の未熟な初期研修医やレジデントたちに、社会との接点に位置する救急医の立場を理解させた上で、即戦力と臨床家精神を身に付けさせる教育は並大抵の苦勞ではない。本書冒頭の相川先生と堀先生による救急診療の心構えと診療の進め方を一読すれば、「鉄は熱いうちに打て」の熱意と現場の緊張感がよく伝わる。多忙な日常診療の傍ら、きめ細かく、最近の話題を簡潔に

「addendum」としてまとめた工夫は高く評価される。また、一般名で記載することの多い治療薬もあえて商品名と具体的な処方量を加えた点にも実践重視の姿勢が貫かれており、好感が持てる。

最後に、患者、家族と救急医のメンタルケアも重要である。うつ状態は多くの疾患予後に影響することはよく知られており、今後の救急医療にぜひ加えるべき領域であろう。さらに「インフォームド・コンセント」、「説明責任」、「クレーマー対策」などに忙殺される救急医たちの健全な精神衛生を保ち、充実した臨床を実感できるシステム作りも示してくれれば、なお良かったと思われる。

治療ガイドラインは年々改変されており、新情報を的確に短時間で得るには現在の冊子体のほかに、CDかDVD版のデジタル教材としてクリック1つで参考文献に飛んでいくなどの工夫により本書はさらに充実すると予想する。研修終了時に本書を基にした体験事例集は各レジデントの一生の財産となることは疑いない。

●B6変型 頁600 2009年
定価6,090円
(本体5,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-00800-6]
医学書院刊